

あゆみ通信

VOL. 127

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

予告 2020年門徒会 員研修大会&あゆみ の会第1回例会合同 研修会 決まる

日時 2020年3月30日(月)
午後1時30分～3時30分

会場 未定

講師 澤田 秀丸先生

講題 「聞法」

仏願の生起・本末を聞 きて疑心あることなし

聞くということ

親鸞聖人は「衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし」と言われます。

「衆生」と言うのは、私たち人間の事です。阿弥陀

仏は、私たち人間と無関係に、そして思いつくままに願いをしておされたわけではありません。人間の有様を見通して、そこから願いを立てられたのです。さらに親鸞聖人は、その阿弥陀仏の本願を、渡り難い海をよく渡す「大きな船」と表現されます。そして私たちのつくる世や人生のことを、渡ることなく途中で沈んでしまう「渡り難い海」と言われるのです。仏教では渡った世界を『彼岸』と表します。迷いに目覚めた覚りの世界です。迷いの岸・海から目覚めの岸に到るのが、仏教の課題です。そして、ぜひとも私たちを迷いの海から救い、目覚めの世界に到らせたいというのが阿弥陀仏の願いなのです。そしてそれは、私たちが迷いの海に沈んで終ろうとしていること、これまでも沈んできたということに気付くことから始まります。ですから、阿

弥陀仏の願いを通して、私たち自身の迷いと、その有様に気付くということが、阿弥陀仏の願いに聞くということなのです。(後略)

(四衢亮「報恩」東本願寺出版から引用)

第2組聞法会 「共に学ぶ『正信偈』」

日時 7月3日(水) 午後2時

会場 佛足寺(天王寺区北河掘町)

講師 新田修巳先生

(平野区 正業寺)

参加費 500円

※次回は8月26日(月)、
光照寺です。

講師は高島洸陽先生(生野区
専光寺住職)です。

第46回近畿連区研修会 大阪で開催

2019年5月30～31日、第46回
近畿連区同朋の会推進研修会



が「真宗門徒日々の生活～お内仏に向き合う～」をテーマに、東大阪市のホテルセイリュウに於いて、大阪教区が当番で135名が参加して開催された(2面につづきます→)

ひとり死んだら

最近、子どもを巻き込む悲惨な事件が相次ぐ。そこで犯人非難として、「死ぬなら一人で死ね」という言葉が、マスコミで芸能人や識者の口から出てくる。

確かに自殺をする際に多くの人を道連れにする「拡大自殺」の感もあるから、被害者家族からは痛恨の極みの率直な意見かもしれない。

ジャーナリストの江口紹子さんは「当事者でない一人としていえることができること」として、アメリカはコロンバイン高校銃乱射事件の加害者の母が、自分が子どもの何を見落としていたかを考え続けて、自死家族との関わりから、自殺が因の事件であるが、世間は全体を殺人と考えることに固執している。彼女は「殺人後の自殺は、自殺の一つの形で、自殺を予防することで殺人も防げる」のを知って欲しいと語っている。また

「誰も不条理な死を強いられることの無い社会」作りをどう行っていくのかが、目指すべきものと言う清水康之氏(自殺対策支援センター)の言葉も紹介されている。阿弥陀さんはどう考えるのかな。(本)

第2組聞法会報告



2019年6月15日(土) 午後2時から、西成区行圓寺(竹内博明住職)を会場に、第2組聞法会が、組内の住職・寺族と門徒・推進員24名が参加して開催された。講師の20組願久寺の藤園恵先生は、大阪教区の教学研修院で共に学ぶ中で聞法の大事さをつくづく気付かされたと話された。

そして聞法によって教えが生活の言葉に表現されたいくつかの例を紹介、一つは「遇うものには遇わんならん」また、「阿弥陀さんのご催促」について話された。また、曾我量深師の「人生における苦しみはすべて如来の激励である」という言葉を、お寺の住職がお寺の掲示板に書いたところ、ある女性がその言葉にとっても勇気づけられたと、そのお寺を訪れ、それが縁でその女性は聞法を始められたと話された。閉会の際に土砂降りの雨となったため、もう10分お話を延長していただくハプニングもあり、一同和気あいあいと、解散された。

(レポート・写真：細川克彦)

如是我聞

藤園先生の法話から 佛足寺 細川 克彦

藤園先生は、最初に20年ほど前に聞いた詩の「ひとつの言葉でけんかして ひとつの言葉でなかなかおり ひとつの

言葉で泣かされて ひとつの言葉で心が痛む ひとつの言葉はそれぞれに ひとつの心を持っている」を紹介され、誰の詩であるのか、未だに分からないが、ずっと心に残っていると。言葉一つにいのち(心)があるから、慎重に使うようにと教えられけれども、実際は自分の使った言葉に振り回されているようだ。」

また、心に残る言葉として教えの言葉で生活の言葉になったものを紹介された。

一つは「遇うものには、遇わんならん」で、もう一つは「阿弥陀さんのご催促」で、共に黙って受けていけということをお話している。また、曾我量深先生の言葉で、「人生における苦しみはすべて如来の激励である」を挙げられ、



火事で類焼したことで災難にあったと嘆く人に対して、この言葉を告げた人がおられると。この言葉から聞法が始まり、苦しみや悩みがあればこそ如来の教えに遇うことが出来たと喜んでおられる人のことも話され聞法を長く続けていればこそ頷かれると話された。

後半では、聞法の大切さについて「蓮如上人御一代記聞書」から、先ず193条の心を蜂屋賢喜代先生の著書「聞法の用意」



から、「いくら聴聞しても分からないからと諦めてしまうのではなく、聞法を続けなさい。阿弥陀さんのお慈悲があるから必ず信心を得ることが出来るから」と。(続く)

(藤園恵先生のお話は、紙面の都合で、次号へ続きます)

近畿連区研修会報告つづき

第2組あゆみの会からは、中嶋ひろみさん、吉田雄彦氏、加藤徳江さん、新谷和代さん、細川克彦、孝子夫妻が参加された。



講師は池田勇 池田勇諦先生

諦先生(三重教区・同朋大学名誉教授)で「真宗門徒の証(あかし)」を講題に、私たちの日ごろの聞法の在り方を問いただされた。

曰く、「聞法が説明や解説を聞くことになっていないか」「教えと自分の関わりを聞く」「教えが私にとって何なのかを聞くことが大事」「本願は私の



本音を知らせ、その本音に生きよと呼び続けている。また、身を持つとは肉体だけでなく、環境も持っている。諸々の因縁がすべて含まれているこの存在のいわれを聞く」「この存在の事実により自我心が降伏させられ、従がわしめられるのです」と、熱く説かれた。

(レポート：細川克彦)